

デモクラシー、大衆運動、全体主義

：ハンナ・アーレント「全体主義」論再考

* 石 田 雅 樹

要 旨

本稿は、ハンナ・アーレントの政治理論における全体主義とデモクラシーとの関係を再考し、その現代的意義を示すものである。そのため本稿では第一に『全体主義の起原』（1951）における「大衆運動」の記述を検証し、「大衆」と全体主義テロルとの関係は単純な加担や同調として描かれていないことを確認する。その際これまで看過されてきた陰謀論や秘密結社に関する記述に注目することで、アーレントの問題提起を再構成する。第二に、アーレントの全体主義論をカール・J・フリードリヒの議論と比較し、両者の共通点と相違点を明らかにする。その際1953年にアメリカで開催された全体主義会議でのフリードリヒの報告と、それに対するアーレントの批評に注目する。両者は共にデモクラシーと全体主義とが密接な関係にある点で見解を共有していたが、フリードリヒがテクノロジーとメディアの発展を全体主義の要因としたのに対して、アーレントが陰謀論や秘密結社化する運動を全体主義の指標とした点に、両者の相違があったことを示す。本稿は以上のように、アーレントの全体主義論を新たな視点から捉え直すことで、現代政治の文脈における「全体主義」の再定義を行うものである。

Key words：ハンナ・アーレント、全体主義、デモクラシー、陰謀論、カール・J・フリードリヒ

はじめに

本稿は、ハンナ・アーレントの全体主義論におけるデモクラシーの位置づけを再検証し、その問題提起の再考を通じて現代的意義を示すものである。アーレントが『全体主義の起原』（1951）において「全体主義」totalitarianismを20世紀の新たな政治現象とし、その危険性を訴えたことは良く知られている。その際にアーレントは、全体主義におけるデモクラシー的側面、すなわち大衆運動の要素を強調することで、それが独裁者による圧政や専制体制の恐怖政治とは異なることを強調した。このアーレントの全体主義論におけるデモクラシーの問題については、既にマーガレット・カノヴァンらによって研究が行われてきたが、本稿はこのカノヴァンらの先行研究を踏まえた上で、二つの視点からアーレントにおける全体主義とデモクラシーとの関係性を問い直す。

第一に『全体主義の起原』における「大衆運動」の

記述を内在的に検証し、それがどのように全体主義運動に展開していったかを再考する。アーレントは「群衆」mobと「大衆」massとの違いを強調し、階級社会からこぼれ落ちた前者のシニカルな暴力性と、階級社会の崩壊に伴う後者の孤立した状況を区分し、後者の大規模な動員こそが、全体主義運動の成功であったと論じている。しかしながら、その「大衆」と全体主義イデオロギーのテロルへの関与、最終的には強制収容所／絶滅収容所を到達点とする全体主義テロルへの関与についての記述を見ると、それを熱狂的加担や同調として描いてはいない。本稿はこの点に関して、これまで看過されてきた陰謀論や秘密結社組織に関する記述に注目することで、アーレントの問題提起を再構成する。

以上を踏まえた上で第二に、『全体主義の起原』が登場した1950年代の全体主義の理論状況を確認し、アーレントとカール・J・フリードリヒの議論を比較することで、前者の理論的独自性を明らかにする。周

知のように1950年代の政治学においては、『全体主義の起原』以外にもヤコブ・L・タルモン『全体主義的民主主義の起原』（1952）やフリードリヒの『全体主義的独裁と専制体制』（1956）など、その後の20世紀の「全体主義」を主導する研究が登場した。本稿では1953年に開催されたアメリカ科学芸術アカデミー主催の全体主義会議におけるフリードリヒとアーレントの対話に注目し、両者における全体主義論の認識の相違を明らかにする。この会議でのフリードリヒの報告にアーレントは批判的応答を行っているが、その際何が共通の了解とされ、何が見解の相違であったのか。この点について本稿は、アーレントが政治運動の陰謀論と秘密結社化に全体主義の指標を見出している点に注目し、フリードリヒとは違った視点からデモクラシーと全体主義の関係性を論じていることを明らかにする。以上を踏まえて本稿は、しばしば濫用されがちな「全体主義」の意味を問い直すと共に、現在の難しい陰謀論にその端緒を読み解く視座を提供するものである。

1 「大衆運動」としての「全体主義」とその問題

1-1 全体主義と大衆運動

「全体主義」totalitarianism という政治言語は、「専制」tyranny や「独裁」dictatorship 同様に、党派的で否定的な意味合いを持つ政治言語であり、それゆえ何がそれに該当するかは一義的ではなく論者によって多様である。「全体主義」という言葉自体は元々1920年代にムッソリーニのイタリア・ファシズムを表現す

るものとして登場しながらも、その後の1930年代におけるナチズムとスターリニズムの抬頭や、戦後の冷戦構造での緊張関係の高まりに伴い、西欧的なリベラル・デモクラシーに対置される政治体制として認識されるようになる¹。ハンナ・アーレント『全体主義の起原』（以下『起原』と略記）もまた、右のナチズムと左のスターリニズムを「全体主義」として両者を非難する点で、他の全体主義論とモチーフを共有する部分も多いが、しかしながらそれは当時の冷戦体制下での米ソ対立を反映したものではなく、独自の政治分析と考察を示すものである²。

同書でアーレントは「全体主義」という言葉を、元々のイタリア・ファシズムの文脈、すなわち個人より国家を重視するという文脈では語っていない。アーレントにおける「全体主義」とは、一方において暴力装置の掌握を通じた抑圧的支配ではなく、個々の人間精神を内面から支配するものである（OT:325=39）。また他方において、それはイデオロギーの無謬性を掲げて現実世界を改変する運動であり、その範囲は国民国家の領土的制約を超えて、最終的には地球全体にも及ぶものである（OT:415=184）。それゆえ「全体主義」とは強制収容所／絶滅収容所を通じて人間の内面性を改変し、「すべての人間を常に同一の反応の塊に変え、その結果これらの反応の塊の一つ一つが他と交換可能なものとなる」存在へと置き換えるプロセスであるとされる（OT:438=231）。そのような意味でアーレントにおける「全体主義」に該当するのは、「イデオロギーとテロル」を通じて虚構の世界を実現しようとし

-
- 1 「全体主義」totalitarianism という政治用語の起原と歴史的変遷については、差し当たり Gleason[1995], 川崎[2002], Traverso[2002=2010] を参照。全体主義という用語がアメリカ外交政策と密接な関係にある点については、Lifka[1989] を参照。エンツォ・トラヴェルソは全体主義について5つの時期区分を以下のように設定している。(a) 1923～33年：イタリア・ファシズムとドイツ保守革命を指す用語として流通する時期。(b) 1933～47年：反ファシズムとスターリニズム批判の文脈で広まり、それに伴いナチス・ドイツとソヴィエトを比較する用語として浸透する時期。(c) 1947～68年：冷戦下において「自由世界」の敵に向けられた反共産主義のスローガンとして用いられた時期。(d) 1968～89年：一方ではアメリカや西ドイツでその有効性が疑われ、他方ではフランスにおいて収容所文学の翻訳から再評価され、東欧では反体制派亡命者によって再発見された時期。(e) 1989年以降：ベルリンの壁の崩壊とソ連邦の終焉などから、冷戦に勝利した西側諸国を正当化するものとして用いられた時期（Traverso[2002=2010:185-186]）。
 - 2 周知のように『起原』ではそのタイトルとは裏腹に、totalitarianism の起原自体は深く検証されていない。当初のアーレントの執筆構想では同書はそもそも「全体主義」をテーマとする著作ではなかった。「最初に構想を立てたとき彼女の本はスターリニズムには特別の注意を払うつもりはなかったし、ナチズムもしくはアーレントの当時の呼び方では「人種帝国主義」には、一章しか割り当ててつもりがなかった（Canovan[1992:18=2004:30]）。こうした点を踏まえ、『起原』は出版後の改訂に伴い「全体主義」の内容自体を変化させてきたことも指摘されてきた。改訂に際して「全体主義」の内容が三つの段階に変化しているという指摘については、Tsao[2002], 森川[2008] を参照。

たナチズムとスターリニズムだけであり、それこそが20世紀において未曾有の政治的災厄を引き起こしたものであるとされている。

『起原』第3部「全体主義」では、この誇大妄想に見える「全体主義」がいかにして現実に政治権力を掌握するに至ったか考察が行われている。ここでアーレントは、全体主義運動の発端と展開において「大衆」mass が重要な役割を果たしたことを強調する。すなわち「全体主義体制が権力を掌握する限りにおいて、また全体主義の指導者が生存する限りにおいて、大衆の支持を最後まで獲得し維持したことを忘却するのは、深刻な誤りである」。重要なのは、こうした「大衆」によるナチズムやスターリニズムへの支持は、気まぐれや消極的妥協などではなく、「愚かさや無知を利用した巧みな欺瞞のプロパガンダの産物では決してない」(以上、OT:306=2-3)という点である。全体主義運動は「大衆」からの政治的支持を獲得したという点において、デモクラシーの帰結であると同時にデモクラシーの解体であるという理解が、アーレント全体主義論の出発点となっている。

それではこの「大衆」とはどのような存在なのだろうか。以下ではアーレントが挙げる幾つの特徴を確認しておきたい (cf. Bear[2007:13])。

- ① 第一に「大衆」とは、政治的に無関心で組織化されない人びとであるという点である (OT:311=10)。19世紀の階級社会においてはそれぞれが所属する階級の利害を代表する政党政治が機能していたが、「大衆」はこの階級社会の崩壊に伴って生じたものであり、それゆえ既存の政党政治と議会制民主主義によっては代表されない多数派である。
- ② 上記に関連して、第二に「大衆」は所属する階級の喪失に伴いコミュニティを失い社会的紐帯

が分断された存在である。アーレントはこの伝統的社会から切り離されながら、それを補完する社会性を喪失した「大衆」の心理状況について、「消耗品感覚」feeling of being expendable (OT:315=20)、「アトム化」atomization (OT:323=23)、「故郷喪失」homelessness (OT:352=81)、「根無し草」uprootedness、「余計者」superfluousness (共に OT: 475=320) といったさまざまな言葉で表現している。また第4章「イデオロギーとテロル」ではこれらを包括するものとして、「大衆」の「孤立」loneliness——自己との対話が行われるとは「孤独」solitude とは異なる——こそが全体主義運動に至った大きな要因であるとしている (OT:474=318-319)。

- ③ 第三に、この「大衆」は、19世紀の暴力的事件を主導した「群衆」mob とは区分される。この点についてアーレントは、「群衆」が19世紀の階級社会からこぼれ落ち、ブルジョワ社会の偽善性に対して暴力も厭わず暴き立てたのに対して、「大衆」は偽善の告発にも、個性の発現にも、英雄的行為にも無頓着であり、むしろ抽象的なイデオロギーに関心を抱いた (OT:307=4) としてその違いを強調する。また全体主義運動の先頭に立ち能動的に活動したのは「群衆」であるが、「大衆」の側にはそうした能動性はなく、運動の帰結を受動的に受け入れた点が対比されている。

1-2 「大衆運動」としての「全体主義」論の問題点 (1) 「大衆」像の分裂

アーレントは以上のように全体主義運動の展開に際して「大衆」の支持が不可欠であったと論じているが、その理解や位置づけの問題はこれまでマーガレット・カノヴァンらによって度々指摘されてきた³。また

3 アーレントの全体主義を論じた先行研究は多いが、デモクラシーとの関係を考察した論稿は限られている。その中で注目すべきは、マーガレット・カノヴァンの研究であり、本稿でもカノヴァンの研究と問題提起から大きな示唆を受けている。カノヴァンは早い時期から、アーレント政治思想におけるエリート論とデモクラシー論の対立、すなわち一方における『起原』での「大衆」デモクラシー批判と、他方で『革命について』での「人民」の政治参加の称賛との対立を問題として提起してきた (Canovan[1978])。こうしたアーレントにおけるデモクラシー論の両義性については、その後「ポピュリズムのパラドクス」という言葉で議論されている (Canovan[2002])。日本における同様の問題提起としては、川崎修がアーレント解釈における問題として論じてきた。川崎は、アーレントの政治思想がナチズムの大衆運動への反省から、リベラル・デモクラシーのように政治からの自由へと向かうのではなく、逆に古代ギリシャ・ポリスやアメリカ革命など人びとに政治的コミットを訴えかける点に注目し、その政治運動・参加の両義性を問題として提起している (川崎[2010:255])。

歴史学や社会学の視点からはその史料解釈の問題が度々指摘されてきた⁴。以下ではこうした先行研究を踏まえつつも、(1) 第一にアーレントの「大衆」論を内在的に辿りながら、その矛盾点や問題点を検証する。それを踏まえて(2) 第二に、この大衆運動とプロパガンダとの関係に関するアーレントの議論を辿り、その際に陰謀論や秘密結社という視点から分析が行われていることを示す。この陰謀論や秘密結社による説明は、従来の研究では看過されてきたが、これらの記述がアーレントの全体主義論において重要な役割を果たしていることを明らかにする。最後に、(3) 「大衆運動」としてのスターリニズムに関する記述を批判的に検証し、アーレントが描くソヴィエト「大衆」像の妥当性を吟味する。

最初に、アーレントの描く「大衆」像の分裂について。先述のようにアーレントは「大衆」について、一方においては「故郷喪失」や「孤立」という言葉でその無私性・私的利害の希薄さを強調したが、他方においては、私生活の安寧に心を砕く「俗物」philistineと表現しており、両者は相容れないのではないかという問題がある。この点については既にカノヴァンやバエーらが指摘するように(Canovan[1992:54=2004:74-75]、Baehr[2007:16])、整合的に解釈するのが困難な部分である。

この「大衆」像の矛盾——無私的な「大衆」/俗物的な「大衆」——は、典型的には強制収容所/絶滅収容所を頂点とするテロルに対してどのような信条や心理において加担したのかに関する記述の隔たりとして表現されている。つまり一方において「大衆」は、戻るべき階級のない「故郷喪失」の状況にあり、社会的紐帯を消失した「孤立」した状況にあったがゆえに、移り変わる現実世界のリアリティを信じることができず、全体主義イデオロギーが提供する虚構の世界を受け入れるようになった、という。すなわち「大衆」がひたすら現実を逃れ矛盾のない虚構の世界に憑かれ

たように求めるのは、アナーキックな偶然が壊滅的な破局の形で支配するようになったこの世界にいたたまれなくなった彼らの故郷喪失(homelessness)の故である」(OT:352=81)。このようにアーレントは「故郷喪失」した寄る辺なき「大衆」を救済するものとして全体主義運動を位置づける。他方において、アーレントは全体主義のテロルの推進には「群衆(モップ)」ではなく俗物的な「大衆」が主役になるとも論じている。というのも、全体主義運動が進み強制収容所を作動させる段階においては、かつて運動を主導した「群衆(モップ)」は障害にしかならず、むしろ受動的な「大衆」によって組織される必要があると言う。

この点についてアーレントが注目するのがナチスで親衛隊を組織したハインリヒ・ヒムラーであり、彼がナチス運動の創始者たちよりも平凡で俗物であったからこそ、「大衆」を組織することができたとされる。すなわちヒムラーは「ゲッベルスのようなボヘミアンでもなく、シュトライヒャーのような性犯罪者でもなく、ローゼンベルクのような狂人でもなく、ヒトラーのような狂信者でもなく、ゲーリングのような冒険家でもなかった」のであり、それゆえ「大多数の人々はボヘミアンでも狂信者でも冒険家でもなく、また性的倒錯者でも間違いでも社会不適合者でもなく、何よりもまず仕事を持ち、良き家庭人であると想定することで、大衆を完全に支配下に置くための卓越した能力を証明した」(OT:337-338=58)。全体主義運動を支持した「大衆」は、果たして自己の私的幸福に無頓着であるがゆえに全体主義の虚構の世界を選んだのか、あるいは日々の私的幸福の安寧を気に掛け良き家庭人・勤め人であろうとして行政的大量殺戮に加担したのだろうか。二つの「大衆」像は相容れず矛盾するように見えるが、アーレントはどちらも全体主義運動のテロルを組織する存在として描いているのである。

4 歴史学の視点からアーレント全体主義論を再評価するものについては、Canovan[2000:36]を参照。社会科学の視点からアーレントの全体主義論を批判的に検証したものとしては、Baehr[2010]、出岡[2017]を参照。アーレントが当時活用できた史料を軽視し、多様なドイツ市民の声を取り上げていないという批判についてはBaehr[2007:17]を参照。収容所についても、アーレントがそもそも強制収容所と絶滅収容所との区別をせず、冥界・煉獄・地獄という表現で曖昧に記述しているという批判がある(Traverso[1997=2002:84-88])。収容所における人間性の剥奪という記述についてもその説明は画一的であり、強制収容所から生還した生存者の語りは、むしろアーレントが語る「全体的支配」total dominationの限界を示すという指摘もある(Aharony[2015])。

(2) 「大衆」とプロパガンダ

このようにアーレントが描く「大衆」像の分裂に関して、それが単一ではなく複数の異なる層から構成されているという解釈も可能かもしれない。だがいずれにしても「プロパガンダ」の位置づけを再検討する必要がある。というのも「孤立」して私的幸福に無関心であったとしても、公共性に関心がなく私的幸福を求める「俗物」であったとしても、「大衆」がどのようなプロセスで全体主義テロルに同調するようになったのかについて、アーレントの記述は整合性を欠くからである。

先述のように、アーレントは「大衆」の全体主義への支持が「愚かさや無知を利用した巧妙な欺瞞のプロパガンダの産物では決してない」と記述していた。しかしながらそうした記述がある一方で、他方では「大衆」が全体主義を徹頭徹尾支持し、強制収容所／絶滅収容所に象徴されるそのテロルに魅了されたとは語っていない。要するに、アーレントは「大衆」が全体主義のプロパガンダに騙されたわけではないとしながらも、他方ではその「大衆」がプロパガンダの欺瞞や恐怖によって運動に絡め取られていくプロセスを描いているのである。

例えば『全体主義の起原』第3部第2章「全体主義運動」冒頭では、このプロパガンダの重要性が説明されている。アーレントはここでプロパガンダは全体主義支配の本質でないとしながらも、それが「大衆」の支持を獲得し運動を拡大させる装置であると論じている。その論点をここで以下のように整理しておきたい。

(1) プロパガンダの対象：大衆宣伝としてのプロパガンダは、全体主義イデオロギーを信奉しない外部に向けられたものである。それゆえ主たる対象は、国外においては非全体主義国家であり、国内においては批判者や非同調者といった運動の目的を知らない者たちである。換言すれば、全体主義の完全な支配体制下、端的には強制収容所においてはプロパガンダ自体が不要となるため禁止される(OT:342-344=65-68)。

(2) プロパガンダとテロル：全体主義のプロパガンダは単なる宣伝ではなく、直接的・間接的な脅迫を伴うものである。例えばナチに敵対する政党员への襲撃は「力のプロパガンダ」

power propaganda として認知され、ナチスの権力が共和国政府よりも強大であることをアピールすることになった。またプロパガンダで名指しされた「客観的な敵」objective enemy——ボルシェヴィズムでは歴史の列車に乗り遅れた者たち、ナチズムでは「自然の永遠法則」に反した者たち——は、個人の考えとは無関係に殺害対象を暗示し、その殺戮準備のメッセージとなった(OT:344-345=68-69)。

(3) プロパガンダの(疑似)科学性と無謬性：全体主義プロパガンダは大衆宣伝という意味合いを超えて、歴史や自然に隠された真理を発見したという疑似科学的主張を行う。それは全体主義指導者の無謬性を裏づける原理となり、確実な未来の予言を訴えることで、偶然性と予測困難な社会状況に疲弊した「大衆」を魅了する(OT:345,347=69-70,75)。

(4) プロパガンダと陰謀論：真理の発見を僭称する全体主義プロパガンダは、現実世界の偽善を告発し、隠された陰謀conspiracyを明らかに照らし出すことを企図していた。それはナチズムにおいては「シオン賢者の議定書」に示されるユダヤ人の世界支配であり、ボルシェヴィズムにおいては「トロツキストの陰謀」や「ウォール街の世界支配」であった。全体主義の指導者は偽善と陰謀に覆われた現実世界からプロパガンダに合致する事実を寄せ集め、虚構の世界を創り上げることで「大衆」を取り込んでいった(OT:354,358=84,90-92)。

このようなプロパガンダの記述と、先述の「大衆」による全体主義の支持が「愚かさや無知を利用した巧妙な欺瞞のプロパガンダの産物では決してない」という記述との間には大きな隔たりがある。「大衆」の支持や同調は、愚かさや無知ではないとしても、その支持の裏側にはプロパガンダの巧妙さや欺瞞性、あるいは同調圧力や脅迫といった要素が存在している。それゆえアーレントが「大衆」の全体主義への加担を語るとき、それはイデオロギーへの熱狂的な支持という単純なものではなく、より複雑なものとして語られている。つまり大衆運動とは、大衆がプロパガンダを通じてその

願望、期待、不安、恐怖といった感情を通じて絡め取られていく過程であり、その「加担」はその帰結が定かではないものに後戻りできない状況として描写されているのである。

「大衆」が全体主義運動に徐々に加担し後戻りできなくなる点については、アーレントが全体主義組織を論じる際にも描かれている。アーレントは全体主義組織が一枚岩ではないことを強調し、イデオロギーへの献身や理解の段階に応じて階層分けされているとし、その組織の姿を「公然たる秘密結社」secret societies in broad daylight と表現する (OT:380=128)。つまり全体主義の組織はその外部から内部にかけて、一般市民／前面組織 (同調者)／党員／精鋭組織／指導者、という形で階層化されており、何が全体主義運動の本質なのか、何が指導者の真のメッセージかの判断は階層ごとに異なり、正常性と異常性が段階的に二重化されている。アーレントはこうした秘密結社の各階層が外部と内部を相互に覆い隠す「ファサード」façade (建物の正面外観) の役割を果たしていたと言う。

支持者の組織は全体主義運動に正常で尊敬できる煙幕をまとうことで、組織メンバーに対しては外部世界の真実を隠蔽すると同時に、外部世界に対して運動の本質を覆い隠す。つまり前面組織は二重の役割を果たすのであり、非全体主義世界に対しては全体主義運動を覆うファサードであると同時に、運動の内的階層に対してはこの〔外部の〕世界を隠すファサードとして機能するのである (OT:367=104, [] は引用者)。

こうした全体主義組織の説明を考慮すると、「大衆」はイデオロギーの全体像やその本質を当初から把握していたわけではなく、最初は「前面組織」として穏健な理解から出発し、運動が過激化する中で、ある者はそのラディカルさを信奉し、ある者は引き戻せない状況に囚われることになったと解釈できる。そして前者の信奉も単なる盲信ではなく、ある種の自嘲や冷笑を伴う信奉であったことは「軽信とシニズムの混淆」mixture of gullibility and cynicism という言葉で表現されている (OT:382=131)。また後者について言えば、一方において「大衆」は運動の終息と安寧を望んでいたが、他方では組織の指導者は「永続革命」を目論んでおり (OT:391=144)、こうした点に両者の

隔たりが存在する。これらを鑑みると「大衆」は全体主義運動の主体であり当事者でありながらも、同時にその運動を統御できず離脱できない存在であったように見えるのである。

(3) スターリニズムと「大衆運動」

『起原』第三部冒頭においては、大衆運動としての全体主義という文脈でナチズム同様にポリシェヴィズムにも「大衆」から支持があったという前提で議論が開始されている。しかしながらアーレントが描く「大衆運動」としてのスターリン体制の記述はしばしば混乱しており、説得力を欠いている。一方において「大衆」からの支持獲得は1930年以降のスターリンによる権力掌握後とされているが (OT:311=11)、他方においては同時期にスターリンが行ったのは、大規模なテロルによる階級の破壊であるとも記されている。アーレントはここで、ドイツでは階級社会の崩壊に伴いアトム化した「大衆」が登場したのに対して、ロシアではスターリン体制下で、農業集団化などを通じて「大衆」のアトム化が行われたと説明する (OT:319=28-29)。こうした「階級」の意図的破壊と「大衆」からの支持との関係をどのように理解すべきだろうか。

アーレントの説明に従うならば、ロシアには元々専制体制下において政治組織も社会組織も存在せず「巨大な無構造の大衆」が多くを占めていた。その中で、革命によって権力を奪取したレーニンは、大土地所有者から土地を没収して農民階級を創り、国家の官僚機構にも対抗しうる労働者階級を創り、そしてネップ政策の下で中間階級を創出しようとして取り組んだ。スターリンが行ったのはこうしたレーニンが創りつつあった階級の徹底した破壊であり、「自分の家族の生命も自分自身の運命も、市民としての仲間たちとは何ら関係も持たず、一人一人が絶対的な孤立無援の状態に置く」 (OT:320=29) ものであった。しかしながら、こうした人びとが「アトム化」を余儀なくされる状況下において、どのようにしてスターリンの政策を支持するに至ったのか説得力ある説明は示されていない。

実際こうした記述の混乱はアーレント自体も気付いていたようにも思える。例えば『起原』1968年改訂版の緒言では、新しい資料としてメール・フェインソッドのスモレンスク文書を参照しつつ (Fainsod[1958→1989])、当時の農業集団化に対し

てスターリンへの支持どころか怨嗟の声が広がっていたことが記されている。

例えば今ではわれわれは次のようなことを知っている—公然たる反対気分が国中にみなぎっていたばかりではなく、汚職と酒浸りが蔓延してもいたため、党の地位は非常な危険に曝されていたこと（…中略）。1928年以降の集団化とクラーク撲滅への突進は、レーニンの経済政策、ネップを実際に中断し、それとともに人民と政府の間に生まれかかっていた和解の芽をも摘んでしまったこと、これらの政策は全農民階級の結束した抵抗を受け、農民は「コルホーズに参加するくらいなら生まれてこない方がましだった」というほどの決意を示し、富農、中農、貧農に分裂させられて反クラーク闘争を喚けられることを拒絶したこと（…中略）などである（OT:xxxi=xiv）。

この時期にスターリンが推し進めた農業の集団化、軽工業をスキップして重工業へ特化した産業転換に対して、農民からの反発、労働者のサボタージュがあったことは良く知られている（cf. 横手[2014]）。アーレントの全体主義論の枠組みでは、こうした拒絶は「階級」社会の最後の抵抗に過ぎないかもしれない。しかしながらこうした「階級」の破壊の後で生じたとされるアトム化した「大衆」がどのような経緯でスターリンを支持するようになったかアーレントは十分な説明を行っていない。少なくとも、ドイツにおけるナチスの政権獲得に果たした「大衆運動」と同じような姿を、スターリンの権力掌握や政策支持の中に見出すことは難しい。

この「階級」の破壊という文脈とは別に、アーレントは「大衆」とソヴィエト全体主義との結びつきを語る際に、1936年モスクワ裁判の事例に度々言及する。1934年のセルゲイ・キーロフ暗殺を発端として、この時期にかつての革命指導者たち（グレゴリー・ジノヴィエフ、レフ・カーメネフ等）が革命の敵として告発されただけでなく、その裁判で被告自らが不利

な「自白」を行ったことは国外にも大きく報道され世界に衝撃を与えた。アーレントはこうしたモスクワ裁判を通じて大規模な粛清が可能であったのはロシアでの「大衆」の支持があったからであり、それはドイツにおけるレーム粛清と同じものであると語る（OT:306=2）。アーレントが依拠しているアイザック・ドイッチャー『スターリン』においても、こうした粛清の中でのスターリン支持が語られており、この裁判にもかかわらず多くの国民はスターリンを諸民族の父、愛する指導者として崇めたとされている（Deutscher[1949→1967=1984:69]）。

しかしながら、こうした「大衆」からのスターリン支持と見えるものにも留保が必要である。アーレントがこのモスクワ裁判を全体主義運動の一環として取り上げる際、それは一方において「大衆」からのテロルへの支持として語られ、他方においては、先述の「大衆」の没我的メンタリティ、私的幸福への無関心を示すものとして語られる。つまり、裁判において自らの死刑宣告に唯々諾々と従う被告の姿が、アトム化した「大衆」のモデルとして語られている。しかしながらモスクワ裁判の被告が革命指導者であったことを想起するならば、被告たちは受動的な名も無き「大衆」ではなく革命を指導したエリートであり、大きな齟齬が存在する⁵。

このモスクワ裁判への「大衆」の支持において説得力ある説明があるとする、それはアーレントが語る「俗物」としての「大衆」、すなわち公的世界に無関心で私的幸福を優先する「大衆」像なのかもしれない。この点に関してアーレントはほぼ言及していないが、例えばドイッチャーに拠れば、スターリン崇拜の中で育った新たな世代は親衛隊の世代に敵意を抱いており、その裁判にも無関心であった。彼らは度重なる粛清で欠落した公的ポストを補完する存在となり、「新しいインテリゲンチヤは、当時の事件にいささかも動かされない熱意と情熱を持って仕事に没入した」のだった（Deutscher[1949→1967=1984:69]）。それを可能にしたのは、アーレントが語る大陸国家ロシアを構成する人口の規模であったのかもしれないが、いずれにし

5 このモスクワ裁判での「自白」に対するドイッチャーの説明は、アーレントとは大きく異なる。ドイッチャーは、被告が検察の協力者として「自白」したのは、肉体的・精神的拷問の帰結であり、さらに家族が人質に取られていた点を想起すべきであると指摘する（Deutscher[1949→1967=1984:62]）。

てもこうした支持は消極的なものであり、ナチズムに比肩しうるポリシェヴィズムの「大衆運動」と理解するのは困難である。

2 デモクラシーと全体主義をめぐる対話：フリードリヒとアーレント

2-1 フリードリヒの全体主義論

『起原』出版の2年後1953年3月に、アメリカ科学芸術アカデミー主催による全体主義に関する会議が開催された。この会議には主催者であるカール・J・フリードリヒの他に、カール・W・ドイチュ、ハロルド・D・ラスウェル、シグムンド・ノイマン等、当時のアメリカの全体主義研究の錚々たるメンバーが集い、報告と討議を行った。会議では「全体主義と自由」「全体主義の本質」「全体主義とイデオロギー」などさまざまなテーマが取り上げられた。アーレントはこの会議で報告こそ行っていないものの、幾つかのセッションに参加し鋭い批評を投げかけている。ここでは先述の議論を念頭に置きつつ、フリードリヒの報告に対するアーレントの批評に注目し、両者の視点の相違を明らかにすることにしたい。

会議の主催者でもあるフリードリヒは「全体主義社会の特異な性質」The Unique Character of Totalitarian Society という題目で報告を行っている。この報告はその後1956年に出版される大著『全体主義的独裁と専制』*Totalitarian Dictatorship and Autocracy*の一部を構成しており、会議のテーマに沿った上で全体主義の問題を提起する内容となっている。フリードリヒはその冒頭で、「ファシズムと共産主義の全体主義社会は基本的に類似しており、他のいかなる政治・社会体制よりも互いに類似している」こと、そして「全体主義社会は歴史的に独特であり、他に類を見ないものであること」(Friedrich[1954→1964:47])という二つの命題を提示し、この二つの命題が密接に関連しており、同時に検証されなければならないと語る。

以上を念頭に置きつつ、フリードリヒはファシズムや共産主義など多様な政治体制を比較検証する中で、全体主義の特徴として5つの指標を挙げている(Friedrich[1954→1964:51-52])。それを要約すると、(1)唯一の公式イデオロギー、(2)支配的な大衆政党、(3)武力手段の統制・武装組織の独

占、(4)メディア支配、(5)警察テロルによる統制、の5つである。これは翌年『全体主義的独裁と専制』で提示される6つの全体主義指標の5つを構成するものであり、これらに(6)中央による計画経済(Friedrich[1956→1965:21-22])が後に追加される。全体主義に分類される政治体制はそのイデオロギーや党派など多くの違いがありながらも、これらの指標を共有する点において過去の専制政治や独裁体制とは大きく異なると論じている。

本稿の視点から興味深いのは、フリードリヒがこれらの指標を提示する中で、全体主義をデモクラシーとテクノロジーの結合として捉えているという点である。フリードリヒに従えば、上記の5つの指標のうち、(3)武力手段の統制・武装組織の独占、(4)メディア支配、(5)警察テロルによる統制といった(3)から(5)の指標はテクノロジーの発展という共通要素があり、例えば過去に市民が銃で武装していた時代と、戦車や原爆といった近代兵器を権力者が有する現代では大きく状況が異なるとしている。その上で、そのテクノロジーの発展に還元できない(1)唯一の公式イデオロギーと(2)の支配的な大衆政党を包括する枠組みとしてデモクラシーの問題を考察している。

かつてのヨーロッパの絶対君主やローマ皇帝は、自らの権力を獲得し行使する上で、一般市民を政治的に重要な存在と認知することはなかったし、ましてやそのために政党を組織することなど理解不能であった。これに対して現代の政治運動においては「マルクスとエンゲルスだけでなく、ムッソリーニやヒトラーも、大衆にアピールするプログラムを掲げた政党を組織し、できるだけ多くの支持者を獲得しようとしていた」のであり、そのためにイデオロギーと政党が大きな役割を果たしている。識字率の向上やキリスト教的伝統における確実性への信仰なども、イデオロギーと大衆政党の形成に寄与してきたが、「しかし、おそらくどちらよりも重要なのは、これらの全体主義社会の「民主主義的」な背景である。マルクスもエンゲルスも、自分たちが当時の民主主義運動の先鋒を担っていると考えていたし、スターリンはソヴィエトの全体主義的社会を「完璧な民主主義」であると、確信を持って語っていた」のである。その点において、「綿密に組織化され、明確な政策とイデオロギーを持つ単一の大衆政党は、現代の全体主義社会の独特な特徴である」(以上、

Friedrich[1954→1964:56-56])。フリードリヒはこのような、大衆デモクラシーとテクノロジーとの結合という歴史的文脈において全体主義の台頭を説明する。

2-2 フリードリヒとアーレントにおけるデモクラシーと全体主義

フリードリヒの全体主義論とアーレントの議論とを比較すると、両者は右のファシズムと左の共産主義の類似性を強調し、その新しさを指摘する点など共通要素も見受けられる。ただそれと同時に両者のあいだには大きな隔たりも存在する。最大の相違は、アーレントが『起原』で全体主義体制をナチス・ドイツとスターリン体制下のソヴィエトに限定するのに対して、フリードリヒはイタリア・ファシズム体制やスターリン支配以外のソヴィエト体制も含めた広範な政治現象として捉えている点にある。換言すると、アーレントが論じる「全体主義」の特徴、すなわち人間の内面性の全体的支配と、国家を超えた世界支配、そしてその実現装置としての強制収容所／絶滅収容所の有無という点は著しく限定的であり、フリードリヒの議論にこれと該当するものを見出すことはできない。

このようなフリードリヒとアーレントの全体主義論の相違を、静態的／動態的なものとして対比することもできるが⁶、本稿で注目したいのは、この会議におけるアーレントの批判的応答の中にこれとは異なる視点の隔たりが示されている点である。討議の中で、アーレントはフリードリヒの報告に対して、まず基本的に議論の内容について賛同し、全体主義をこれまでと異なる新たな政治形態と位置づけている点を評価する(Arendt[1954→1964:76])。その上でアーレントは幾つか見解を述べているが⁷、その中で大衆デモクラシーと全体主義に関する論点に言及している。ここでアーレントはフリードリヒによる全体主義運動の論点整理を踏まえた上で、多様な政治運動のうち、全体主

義に至るものとそうでないものをどのように峻別できるか問いかける。例えば、これまでも政府打倒を目指す様々な革命運動は存在したし、イタリアやスペインにおいてもファシスト運動はあったがそれは一党独裁に留まり全体主義支配に至ることはなかった。何が全体主義運動で、何がそうでないかは、後知恵でしか分かり得ないのか、そうした点をアーレントは問題として提起している(Arendt[1954→1964:77])。

この問題に対してアーレント自身はどのように考えていたのだろうか。アーレントは応答の中で、全体主義に至る大衆運動と非全体主義の運動との違いとして、陰謀論的思考と手段を共有する点であると論じている(Arendt[1954→1964:77])。先述のように『起原』では、全体主義プロパガンダにおける陰謀論が論じられ、見えない敵からの不当な攻撃と陰謀に対抗するために、自分たちも共謀しなければならないという陰謀論的思考こそが全体主義運動の特徴であるとされていた。アーレントはこうした『起原』での議論を踏まえつつ、全体主義に向かう運動の特徴として、第一にその支持者たちが隠れて行動するのではなく白昼堂々とその荒唐無稽な陰謀論を展開すること、第二に運動の中枢には秘密や奥義など存在せず、「公然たる秘密結社」という組織形態を有していると主張する。アーレントはこのように「公然たる秘密結社」と化す大衆運動こそ、全体主義へ到る最初の一步であるとし、その危険性を以下のように語る。

簡単に言えば、私は次のような運動全てを全体主義的であると呼ぶことにしたい。その運動とは、階級や国家の敵、あるいは政府の政策と闘うのではなく、シオンの賢者、トロツキスト、ウォール街の陰謀と闘うといった運動である。典型的な全体主義的思考は自由社会に忍び込むが、それは例えば次のような場合に該当する。それは、ニューディール

6 カノヴァンは、フリードリヒの全体主義論の特徴が体制の硬直性・均一性・透明性・不動性の強調であるとして凍った湖に喩えるのに対して、アーレントの全体主義論では逆に人間的なものを破壊し押し流す点を強調するとして、それを急流やハリケーンに喩え対比している(Canovan[2000:26])。

7 本稿で取り上げた大衆デモクラシー以外の論点として、アーレントは軍隊の権力喪失と秘密警察の権力掌握を全体主義の特徴として指摘する。その際にナチス・ドイツにおいてはレームがヒムラーに取って代わられた点、ソヴィエト・ポリシェヴィズムにおいてはかつての赤軍が権力を喪失し警察の監視下に置かれるようになった点を事例として提示する(Arendt[1954→1964:76])。このような主張は、フリードリヒが5つの指標を論じる中で、アーレントの『起原』における秘密警察の問題に言及しながらも、それを重視しなかったことへの批判的応答と読み取ることができる。

やフェアディールに対する共和党の過去の反対が、アメリカ政府の政策に影響を与える陰謀的一派が政府内部に存在すると騙る人々たちによって歪められるような場合である (Arendt[1954→1964:78])。

以上の主張は、フリードリヒのみならずアーレントに関しても検討すべき問題を提起する。第一にこうしたアーレントによる陰謀論の説明は、フリードリヒの全体主義とデモクラシーの議論で欠落した部分を補うものである。先述のようにフリードリヒもまた全体主義におけるデモクラシーの重要性を論じていたが、しかしながら指導者たちは実際「どのようにして」大衆からの支持を獲得できたのか、それは単にテクノロジーの発展という視点では説明できない。こうした空白を説明するものとして、アーレントの議論は有益であると考えられる。

他方でアーレントに関しても、このような秘密結社と陰謀論を指標として全体主義を幅広く捉えることは、『起原』とは別の視点を提示することになる。先述のように、この陰謀論自体は既に『起原』において論じられていたが、その際にはナチズムとスターリニズムに限定して議論が展開されていた。しかしながら、この陰謀論に関わる政治運動を全体主義の端緒とする考えは、全体主義をナチズムとスターリニズムに限定する立場からの大きな転換であり、端的に言えばフリードリヒ以上に全体主義の対象を拡大することになる。事後的な視点から、強制収容所に典型的な行政的大量殺戮を指標として全体主義を論じるのか、あるいは事前の視点において陰謀論的な大衆運動に注目して全体主義を幅広く捉え警戒すべきなのか。アーレントの主張はこの点で一義的ではなく、事前と事後という二つの視点から問題を捉えようとしているのである。

3 結びに代えて

本稿は『起原』における大衆運動の内実を検証することで、アーレントが全体主義とデモクラシーとの関係をどのように考察し、どのような問題提起を行ったのかを明らかにしてきた。つまり、アーレントが語る

大衆運動としての全体主義とは、単に大衆の熱狂的支持に還元できるものではなく、また私的幸福に無関心な者たちの破壊願望というものでなく、より多面的な様相を有するものであった。それは、人びとの不安や願望から出発しながらも、最終地点を知らない列車に途中下車できずに乗り合わせるようなものであり、イデオロギーの陰謀論的世界観に基づいて、人びとを「公然たる秘密結社」に絶えず動員し続けるプロセスに他ならなかった。

全体主義とデモクラシーに関するアーレントの議論の独自性は、同時代のフリードリヒと比較することでも明らかにされた。全体主義がデモクラシーの否定や欠如ではなく、その歪んだ形体である点については、フリードリヒもまたアーレント同様に理解していたが、両者はデモクラシーを歪める要素として異なるものに注目した。すなわち、フリードリヒが全体主義における大衆支持獲得の手段として、テクノロジーとメディアの発達に注目したのに対して、アーレントは政党組織や運動自体の変質、先述の「公然たる秘密結社」に全体主義独自の要素を見出したのだった。

本稿においてアーレントを取り上げたのは、単にハンナ・アーレント研究の深化だけではなく、現代政治における「全体主義」の問い直しという意味合いがある。「全体主義」という言葉が濫用される弊害をアーレント自身も当時から問題視したが⁸、それではどのような政治運動や政治体制が「全体主義」と呼ぶのに相応しいのだろうか。

本稿で示したように、全体主義とはある日突然社会に降りかかるものではなく、人びとの願望に根差した運動によって成立するものであり、その点で、西洋近代化に伴う資本主義や合理主義といった社会変化の延長にあるものではなく、また官僚支配や社会の同調圧力などに還元できるものでもない。あるいは、人びとの不満の矛先が国内の少数派や外国人に向かい、ナショナリズムや排外主義的な主張を展開したとしても、それは必ずしも全体主義に至るわけではない。

アーレントに従えば、全体主義に連なる大衆運動とは、自分たちは見えない敵から攻撃を受けていると主張し、白昼堂々と荒唐無稽な陰謀論を展開する点にそ

8 例えば当時においてアーレントは「全体主義」がキャッチフレーズとして濫用されているとし、かつての政治的悪が「帝国主義」として語られていたのと同じ点を批判している (Arendt[1994b=2002:127])。

の萌芽が存在する。そして陰謀を共有する者とし不在者とを峻別する「公然たる秘密結社」が強まることで、その運動は限りなく全体主義へと近づくことになる。人びとが対話や交渉のための言葉を拒絶し、デマゴーグを非難する者こそデマだと反発して、一片の事実さえも共有されなくなったとき、政治は消失し全体主義が訪れることになる。

全体主義は過去の過ぎ去った歴史事象ではなく、20世紀の政治問題であることは繰り返して論じられてきた。ただその際、アーレントは全体主義をデモクラシーの欠如や消失ではなく、その過剰や歪みとして問題を論じていたことは再確認すべきであろう。そしてアーレントにおける陰謀論と、フリードリヒの語るメディアの進化とを重ね合わせると、それが負の相乗効果をもたらし、大衆運動（今日で言えばポピュリズム）は以前よりも容易く全体主義運動へと転化し得る点も留意すべきであろう。敵対する政治指導者が互いを陰謀論として罵り合い、草の根では巨大資本や支配エリートの陰謀を非難する言説がネットワークを飛び交う状況になって久しい。そうした状況において、どのようにして全体主義へ陥る道筋を防ぎ、どのようにして対話の可能性を構築する——アーレント的に言えば「共通世界」を取り戻す——ことができるだろうか。その可能性の道筋を探るためにも、アーレントという過去の実思想家を忘却から呼び起こし、改めて読み解く必要があると思うのである。

謝辞

【本研究は、2024年度科学研究費・基盤研究C「ジョン・デューイと「全体主義の時代」に抗する教育政治学的研究」（24K05650）の研究成果の一部である】

参考文献

邦訳は訳書があるものは基本的に従っているが、必要に応じて変更している部分もある。

Hannah Arendt 文献

- ・Arendt, Hannah, 1947, "The Hole of Oblivion." *Jewish Frontier*, 14 (7) : 23-26.
- ・——, 1949, "Totalitarian Terror", *The Review of Politics*, 11 (1) ,

112-115.

- ・——, 1951→1973, *The Origins of Totalitarianism, New Edition with Added Prefaces*, Harcourt Brace & Company. =1974→1981, 大久保和郎・大島かおり（訳）『全体主義の起原』〔反ヤダヤ主義、帝国主義、全体主義〕みすず書房（独版*Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, Europäische Verlagsanstalt, 1962 も参照、OTと略記し英原文と邦訳を記載した。今回の邦訳はすべて第三部らのものである）
- ・——, 1994a, "Organized Guilt and Universal Responsibility", Jerome Kohn (ed.), *Essays in Understanding: 1930-1954*, Harcourt Brace & Company, 121-132. =2002, 「組織的な罪と普遍的な責任」 齊藤純一・山田正行・矢野久美子（訳）『アーレント政治思想集成：（1）』みすず書房, 165-180.
- ・——, 1994b, "Understanding and Politics (The Difficulties of Understanding)", Jerome Kohn (ed.), *Essays in Understanding: 1930-1954*, 307-327 =2002, 「理解と政治（理解することの難しさ）」『アーレント政治思想集成：（2）』122-147.
- ・——, 1954→1964, "Discussion" Carl J. Friedrich (ed.), *Totalitarianism*, The Universal Library, 75-79.

その他の文献

- ・Aharony, Michal, 2015, *Hannah Arendt and the Limits of Total Domination: The Holocaust, Plurality, and Resistance*, Routledge, 2015.
- ・Arato, Andrew, 2002, "Dictatorship Before and After Totalitarianism," *Social Research*, 69 (2) : 473-503.
- ・Baehr, Peter, 2007, "The 'Masses' in Hannah Arendt's Theory of Totalitarianism." *The Good Society*, 16 (2) , 12-18.
- ・——, 2010, *Hannah Arendt, Totalitarianism, and the Social Sciences*, Stanford University Press.
- ・Bernstein, Richard J., 2002, "The Origins of Totalitarianism": Not History, but Politics." *Social Research*, 69 (2) , 381-401.
- ・Canovan, Margaret, 1978, "The Contradiction of Hannah Arendt's Political Thought", *Political Theory*, 6 (1) , 5-26.
- ・——, 1992, *Hannah Arendt: A Reinterpretation of her Political Thought*, Cambridge Univ. Press. = 2004, 寺島俊穂・伊藤洋典（訳）『アーレント政治思想の再解釈』未来社.
- ・——, 2000, "Arendt's Theory of Totalitarianism: A Reassessment," Dana Villa (ed.) *The Cambridge Companion to Hannah Arendt*, Cambridge Univ. Press, 25-43.
- ・——, 2002, "The People, the Masses, and the Mobilization of Power: The Paradox of Hannah Arendt's 'Populism,'" *Social Research*, 69 (2) , 403-22.
- ・Deutscher, Isaac, 1949→1967, *Stalin: A Political Biography*, Oxford University Press. =1984, 上原和夫（訳）『スターリン：政治的伝記』みすず書房
- ・Fainsod, Merle, 1958→1989, *Smolensk under Soviet rule*, Unwin Hyman.
- ・Friedrich, Carl J., 1954→1964, "The Unique Character of Totalitarian Society" Carl J. Friedrich (ed.), *Totalitarianism*, The Universal Library, 46-60.
- ・Friedrich, Carl J., and Brzezinski, Zbigniew K., 1956→1965, *Totalitarian Dictatorship and Autocracy*. Harvard University Press.
- ・Gleason, Abbott, 1995, *Totalitarianism: The Inner History of the*

- Cold War*, Oxford University Press.
- ・ 出岡 直也, 2017, 「社会科学としてのアーレントの全体主義論：アーレントに反することで、アーレントとともに？」川崎修・萩原能久・出岡直也(編著)『アーレントと二〇世紀の経験』慶応大学出版局, 119-155.
 - ・ Kateb, George, 2002, “Ideology and Storytelling,” *Social Research*, 69 (2), 321-57.
 - ・ 川崎 修, 2002, 「全体主義」福田有広・谷口将紀(編)『デモクラシーの政治学』東京大学出版会, 72-90.
 - , 2010, 『ハンナ・アーレントの政治理論：アーレント論集 I』岩波書店.
 - ・ Kohn, Jerome, 2002, “Arendt’s Concept and Description of Totalitarianism.” *Social Research*, 69 (2), 621-56.
 - ・ Lifka, Thomas E., 1988, *The Concept "Totalitarianism" and American Foreign Policy*, Garland Publishing.
 - ・ 森川 輝一, 2008, 「『全体主義の起原』について——50年代のアーレント政治思想の展開と転回——」『政治思想研究』8, 116-145.
 - ・ Traverso, Enzo, 1997, *L'Histoire Déchirée: Essai sur Auschwitz et les Intellectuels*, Les Editions de Cerf. =2002, 宇京頼三(訳)『アウシュヴィッツと知識人：歴史の断絶を考える』岩波書店.
 - , 2002, *Il totalitarismo*, B.Mondadori. = 2010, 柱本元彦(訳)『全体主義』平凡社新書.
 - ・ Tsao, Roy T., 2002, “The Three Phases of Arendt’s Theory of Totalitarianism,” *Social Research*, 69 (2), 579-619.
 - ・ 横手 慎二, 2014, 『スターリン：「非道の独裁者」の実像』中公新書.
 - ・ Young-Bruehl, Elisabeth, 2002. “On the Origins of a New Totalitarianism.” *Social Research* 69 (2), 567-78.

(令和7年1月14日受理)

Democracy, Mass Movement, Totalitarianism

: Rethinking Hannah Arendt's Theory of Totalitarianism

ISHIDA Masaki

Abstract :

In this paper, I will clarify Hannah Arendt's views on the relationship between democracy and totalitarianism and discuss its relevance today. First, I will critically examine the portrayal of the political involvement of the "masses" in *The Origins of Totalitarianism* and argue that their role in the totalitarian movement is ambiguous. Experts have suggested that the mobilization of politically isolated "masses" was important in the development of totalitarian movements, but there has been no consistent description of the relationship between these "masses" and totalitarian terror, which ultimately leads to concentration camps and extermination camps. Second, I will compare Arendt's theory of totalitarianism with the arguments of Carl J. Friedrich and discuss the originality and issues of Arendt's theory. I will focus on Friedrich's report at the Totalitarianism Conference in 1953 and Arendt's comments on it, highlighting both common understandings and differences in their opinions. This paper aims to rethink Arendt's theory of totalitarianism to demonstrate the validity and appropriateness of the term "totalitarianism" in modern politics.

Key Words : Hannah Arendt, totalitarianism, mass movement, conspiracy theory, Carl J. Friedrich,

